

## 審査の結果の要旨

氏名 マフング チャピ° ミレイ

本論文は、日本の都市空間の特徴である木造戸建ての密集空間に関して、隣棟間の空隙を通して奥空間が見通せることを屋外空間の視覚的連続性として顕在化し、その変遷を詳細に跡づけることによって日本の高密度の都市空間の今日的状況を論じたものである。この作業を通して日本の木造密集空間の特質を明らかにすることを目的としている。

論文は、研究の目的、構成および既往研究の成果と本論文の位置づけを述べた序章に続き、二つのパートから成っている。第1部は、理論編として、都市景観における視覚的連続性をはじめとして各種連続性分析の従来の成果を俯瞰し、形態的アプローチとそこにおける視覚的な連続性分析の意義を明らかにしている。

第1部は2つの章から成っている。

第1章は、連続性に関する各種定義を明らかにし、連続性を分析するための手法としてウェブ理論及びスペースシンタックス理論を批判的に検証している。

第2章では、都市の外部空間分析にあたって、形態学的アプローチとりわけ視覚的な側面からの形態学アプローチの有効性を示し、空間の読解可能性の高さを計測するツールの有効性を明らかにしている。

第2部は、第1部で有効性を明らかにした視覚的連続性の分析を東京都新宿区若葉地区において行ったケーススタディの詳細な分析である。第2部は3つの章から成っている。

第3章では、ケーススタディの対象とした新宿区若葉地区の概要を歴史的な発展過程及び現状の空間分析の両面において論じ、若葉地区が詳細分析を実施するに相応しい都市空間の代表例、とりわけ下町的な木造密集の都市景観の代表事例であることを実証的に明らかにしている。

第4章は、若葉地区の木造密集空間の視覚的連続性の詳細な分析を行った章である。視覚的連続性を表通りからの視覚的連続性と裏通りからの視覚的連続性に分け、さらに両者を表通りから裏通りまで抜ける連続した視線と途中の建築物によって遮られる視線とに分け、合計4種の視覚的連続性の総合的な分析を行い、次いで、それぞれの連続性の相互関連を新たな指標としてさらなる分析を行っている。その結果、時代が下るごとに視覚的連続性が低下し、それぞれの相互干渉も減少していくことを明らかにしている。

第5章では、第4章でおこなった形態学的な分析を現地の具体的な景観と照合しつつ、都市空間の機能との関連性を論じ、さらに当該地区居住者の空間認識との整合を議論して

いる。具体的な地区分析を通して、規模・重層性・複合性が地区レベルでの視角情報を統合する際の鍵となることを示している。以上から視覚的連続性の分析作業が実体上も機能上も意味のある空間分析となり得ていることを明らかにしている。

以上の議論を踏まえて、最終結論を述べる結章では、各章において明らかにしてきたことを総括し、視覚的連続性の指標が日本の木造密集型の都市空間の特質を明らかにする際に有効な分析手法であることを結論づけている。

以上、本論文は、欧米の閉鎖型都市空間とは異なる、隣棟間隔を有する日本の木造密集型の都市空間固有の特質を的確に表現し、分析するツールとして、視覚的連続性という概念を提唱し、これによって都市空間の有効な分析が実施できることを初めて示した論文として価値が高く、都市空間分析の一般論の深化に貢献する優れた論文として高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。